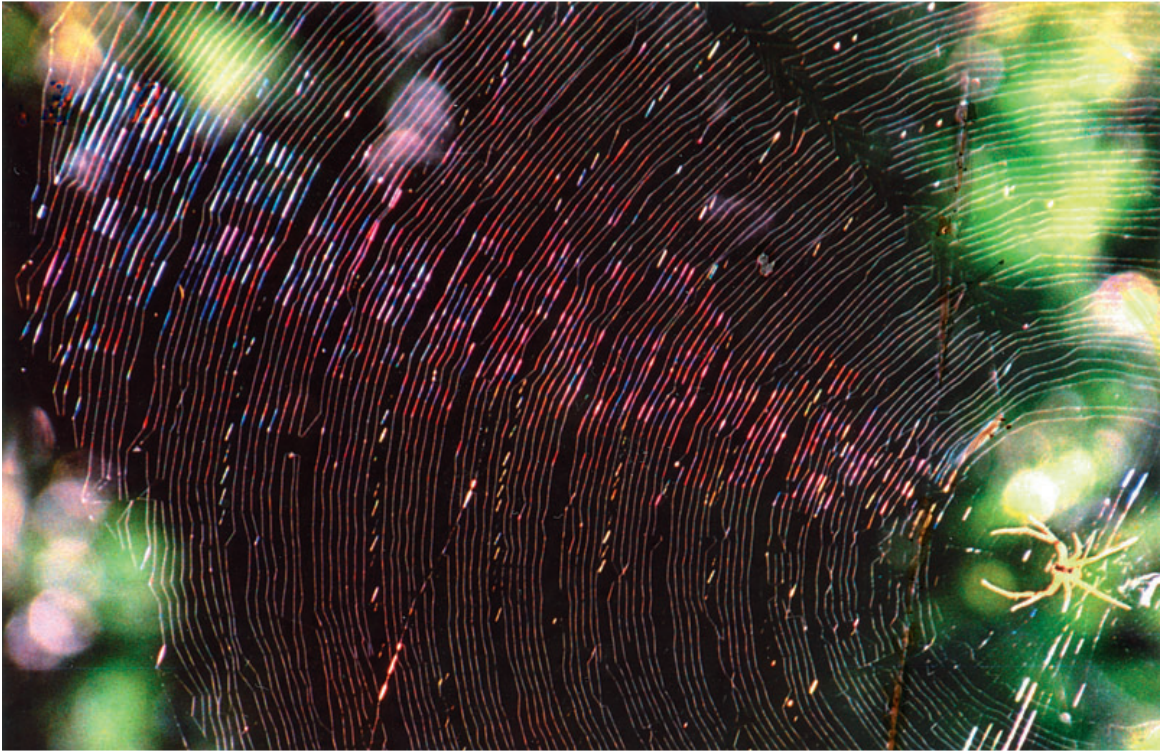


おおやまと

大倭出版局・大倭紫陽花邑

令和6(2024)年
7月号
通巻647号
毎月23日発行
(題字 矢追日聖)

★発行日 令和6年7月23日
★発行所 大倭出版局
〒631-0042 奈良市大倭町1の12
☎(0742)45-1192
★印刷 大倭印刷製
★定価 1部 300円
年間購読料3,500円(送料共)
★郵便振替 01050-6-67002
大倭出版局
URL <http://www.ohyamato.jp>



蜘蛛(くも)の巣 井手 泉さん撮影(文・8頁)

私とおおやまと 30年の時を超えて(当時と現在)

私とおおやまととの出会いは、十三年前に遡る。社会学者の真木悠介氏の著書、『気流の鳴る音』の中で、「大倭紫陽花邑」という名を初めて知りました。真木氏の紹介で、大倭にすみはじめたばかりの石垣雅設さんをたずねました。藤ノ木台一丁目でバスを降り、坂を下って、登美学園寮を左に見ながら、大倭に足を踏み入れると、ちょうど、エレベーターが動き出す時のような、「フツ」と、別の世界へ入り込むような気がしました。

法主さんに、初めてお会いしたのは、「野草塾」だったと思います。大倭会館で皆と待っていると、法主さんが白い縞の着物であられた。その時の印象は、強烈で、ちょうど法主さんの身体から、

法主さんの言霊(再録)

三重県四日市市 中村 勝彦

平成6(1994)年1月号の本紙で、大倭50年を迎えるの「私とおおやまと」というアンケートを実施し、9人の方に回答を書いていただきました。それを読まれた法主様は、同年1月23日の月次祭での法話の中で深く心を動かされたという感想を述べられています。(3頁参照)

今回はその中からお2人の文章を再録するとともに、それを読み返してみても今何を思うかを書いていただきます。この企画は来月号も続ける予定です。(編集部)

白いシャワーのようなものが、パーと出ているようでした。初めての体験で、「ああ、こんな人もいるんだなあ」と驚きました。

その後、数年間は大倭の地を踏んだのは、一度だけだったと思います。新聞だけは、毎号読ませていただいておりますが、あまり、身近に困ったことがなかったからでしょうか。よく、お邪魔するようになったのは、平成元年以降です。昭和六十三年に高校教員をやめて、鍼灸師として生計をたてるようになりました。平成元年に郷里で開業しましたが、安定した公務員から、自営業に転じたことで、経済的不安、自分の治療方法に対する葛藤などを抱えてましたから、そんな時に読んで、『とおやまと』の法主さんの言葉に、なんとなく、妙な味を感じたとしてもいいでしょうか。コミュニケーションとしての「紫陽花邑」ではなく、顕微鏡にいまぎった、得もいわれぬ味の世界としての「大倭」にひかれて、また行ってみたいくなりました。

法主さんに、直接、お話をし、「はじめにやらなあかん」「あなたの先祖はこんな仕事してたんやなあ」と、たった一言、二言いわれたことが、妙に私の胸を打ち、以後、私の心は大きくぶれなくなりしました。現在、心身とも安定して暮らせるのも、法主さんの導きあってのことと、喜んでおります。

現在の関心は、自分自身の向上とでもいいいますか。「腹のたたない自分」「人を喜ばせられる自分」に一步でも近づきたい。法主さんがいわれるには、人間は死の真実で自分の人生を総決算し、プラスが多ければ霊界でも安らかで、マイナスが多ければ苦しむ。現界の生活態度がそのまま、霊界の生活になるそうです。自分の現界や霊界での生活も安らかであってほしいし、その為には、私の先祖(カミさん)も安らかになってほしい。

今の自分には、根本のところ、法主さんの言葉が自分の身の処し方を正すバロメーターになっているな、と感じています。勿論、邪心が起ころうのは、しょっちゅうで、情けない限りですが、そういう時は、大倭の地を踏み、法主さんをはじめ、見慣れた方々のお顔を拝見することにはしています。今後共、どうぞよろしくお願い致します。

30年前の自分に出会って (現在)

30年前の自分の文章を読み返してみると、当時の自身の状況が蘇ってきて、胸がいっぱいになる。「懐かしい」思いもあるが、二度とできないだろうとも思う。

安定した公務員を辞めて、自営業を志した頃で、碌に泳ぎ方も知らないのに大海原に飛び込んだようなもの。しかも妻と子供2人を抱えて。傍から見たら「なんて無謀な事を！」世間知らずにも程がある！と思われたでしょう。大分「イカレテ」ましたね。事実、仕事はしていましたが、放心状態だったかもしれない。

そんな時、法主さんは「真面目にやらなあかん」「あなたの先祖はこんな仕事してたんやなあ」とおっしゃってくださった。以来、30年、いまだに大海原を泳いでおります。学齢期前だった子供2人は成人し、仕事と子育てに奮闘中。妻は逃げ出さずに伴泳してくれています。

当時の状況と現在の自分を振り返ってみると、本当に奇跡の連続だったのでは、と思う。法主さんの「言霊」を推進力に、いろんな「奇跡」のおかげで、今日の自分がある。地雷はたくさんありました。一つでも踏んでいたら、今の自分はない、とも思う。もちろん、この「奇跡」には自分の受

け止め方もある。奇跡の種は、法主さんの言われる宇宙に遍在する生命エネルギー。この生命エネルギーは宇宙に遍在しているのであるが、どうやって捉えたらいいのか。常々、法主さんも表現するのにも苦心されていた。

目には見えないが、毎年、忘れずに桜の花が咲くように。その根源にある生命エネルギー。私も、その生命エネルギーの「御利益」にあずかっている。

今後この流れに沿った生き方をする。私には、このエネルギーを捉えるのにニュートリノを捉える「スーパーカミオカンデ」のような大規模な観測装置はない。地下1000mにもぐって観測することもできない。日々の暮らしの中で、淡々と暮らす。これが、目下の目標です。

癒しの場 (再録)

新潟県佐渡郡現在佐渡市

大滝 哲也

一九七六年、東京で「ワル」の中学二年生だった私は、三年に進級するときに親のついでで神奈川県鎌倉市の学校に転校しましたが、心の支えだった悪友達と引き離されたこともあり、それまでくすぶっていた自分を含めた人間不信が増し、学校をずっと休むようになりました。そのうち人の顔を見て話すことが出来なくなり、毎日があまりにも辛くて、死のうと思つたことさえありました。「とにかく家を出ないと自分は一生このままだ」と考えるようになった頃、祖母が入院していた老人病院のケースワーカーをしていた石川愛人さんと出会うことが出来て、彼に相談したところ、大倭紫陽花邑を紹介して下さいました。

私は家を出て移り住むことを決心しました。一九七九年春、私が十七才のときです。

大倭では杉本順一さんが窓口になって下さり、当時一門だった津田貢さんの部屋に同居させてもらえることになって、青山日元さんのもとで、主に津田さんと一緒に田畑を中心とした外回りの仕事をする毎日となりました。

この間に教えてもらったさまざまなことが、現在の私の生活の中で十二分に生かされています。また、大倭の人、訪れて来た人とのこの一年間での出会いと出来事はとくに忘れることが出来ません。

こんな私に対して皆さんごく普通に接してくれただお陰で、人間不信も溶けてゆき、翌年の春には同世代の人達との出会いを求めて、定時制の高校に通うことが出来ました。

社会復帰という点から、仕事場は畑よりも印刷の方がいいということになり、中島健さんをリーダーとする大倭印刷に移り、その二階の工場長青山法義さんの部屋でやっかいになることになりました。

印刷の人達はもちろん、学校の友達と先生、施設で働く人達、交流の家とFIWCの人達、野草社とその仕事にたずさわる人達、そこに訪れて来る人達等、さまざまな出会いと出来事の中で私はそれなりに成長し、意識はほとんど外に向けてゆきました。

一九八七年春に大倭印刷を退職するまで、私にとって大倭は、人との出会いを通じて心の病を癒し、社会的に成長していける場でした。

大倭で学んださまざまなことを生かしながら左渡で生活する現在、自分を含めたすべての人々の幸せのために何かのあたちで役に立っていく毎日でありたいと思っています。

最後になりましたが、大倭の祖である法主さんこと矢追日聖さん、かあさんこと矢追鈴月さんを

はじめとして、この五十年間大倭に住み、かかわってきたすべての人達（今は亡き人もいます）に改めて深く感謝するとともに、かつての私のような心の苦しみをもった人々のための癒しの場としても、大倭がこれからも未永く発展していけることをお祈りして、この稿を終わらせていただきます。

大倭弥栄！ 拍手 合掌

変わっていないが（現在）

30年ほど前なのに、今の気持ちとほとんど変わっていませんが、文章にやや力がこもっていて今読むと少し恥ずかしいです。63歳の今となっては何事にも無理が利かなくなり、自分の面倒を見るだけで精一杯になっていますので。大倭で教わった畑仕事や木の伐採、暮らしなどの情報をインターネットを通じて、離島の山間地から発信できていることに幸せを感じています。

アンケートの回答文章を読んだ 法主様の感想（再録）

お経の意味

それからね、尚ね。皆さん方の手元にコレ（本紙一月号）皆いつてますわね。

ここに十人（※正確には9人。以下同様）ののね、アンケートがありますね。これを今日も読みましょかと会長さんが言わはったんですけれども、私はこれは読まないでほしいと言いました。こんなものをね、ツルツルツルとたて板に水流

すみたい読んでもらったらね。何にも残らないと思うんです。

何にも意味がないと思うんですね。

それよりも、アンケートに答えてくれた人の心というものを、自分の中に感じとってコレを読んでもほしい。

私、昨日読んでみたんです。涙出ました。

ホンマに。……

一寸思うだけでも胸つまりますねん。

……

まあ、このね。たった十人ですけれども。しかしよくこれ書いてくれたなと思ってね。非常に私はうれしんです。

まあこの人たちが大倭との最初のいろんなキツカケね。最初の結縁を、はじめから皆だいたい書いてくれてはります。

これを読んだ時に……。

こんなにホンマに喜んでくれる、この気持ちが私の本当の希望するところございまして。

ここに書いておる十人の方が、これだけ喜んでくれる。これ見た時に。私はもういつでもこの世の中から消えたかて、自分のお役目は済んだなど、本当にそう思っておるんです。ホンマに私はうれしんです。

丁度お釈迦さんがたくさん説教された時の、たくさんさんの経文がありますけれども、経文のはじめの所に如是我聞と皆書いてます。あれはお釈迦さんの書かれたものじゃありません。弟子達が、我々の如く聞けりとして書いたものがお経なんです。丁度私がこれを読んだ時に、自分がこの世の中に存在してる為に、こうして喜んでくれる人が出来たんだなあ、とそう思うだけで非常にうれしんですよ。

今日はコレを、スラスラスラと読んでほしくな

いんですよ。
 やっぱりね、心して皆さんね、これを読んでほしいなと思うんです。
 丁度仏教のお経みたいなもんなんです。
 これは大倭に来て、そしてまあ例えば矢追日聖の心と通じる所があったり、とらえることが出来たり、それで喜びを持つことが出来たり、というような事を書いていらっしやるんですけれども。お経というものもお釈迦さんから聞いて、それをみなあれ書いておるんです。

大倭会文化行事報告

一度ならず何度でも

京都府宮津市 藤 本 宏 秋

6月16日(日) 未明、丑三つ時に目が覚めた。その瞬間、「そういえば、今日は大倭会文化行事で、木曾義仲さんのお名前を見たような……」と、ダウンロードしてスマホ内に保存されている『おおやまと』のバックナンバーを探した。案内のコースには清水寺もあり「これは行くしかない」と決断。もう一度寝ようとするが、小学生が遠足の前日にワクワクしすぎて寝られないのと同じように眠れない。何度も何度も寝返りを打っては、この四半世紀の流れを振り返った。平成11年(1999年)10月、北陸へ斎藤実盛さんの塚を訪ね、その翌年(2000年)10月には琵琶湖一周の旅で義仲さんと巴御前さんの塚を訪ねたこと。2003年には、阿弖流為さんや母禮さんの塚を訪ね、その後、桓武天皇陵や、坂上田村麻呂さんのお墓を訪ねる流れとなったこと。その時々にご一緒した大倭有縁の皆様の笑顔が去来し、その中には、すでに霊界へ帰られた方々も何人かおられた。

私はね本当に「おおやまと」をお経として皆さん読んでほしいなと思うんです。
 もう胸がつまりまして、これに対して話すことが出来ませんので、これで失礼します。
 ありがとうございます。
 『おおやまと』平成6年4月号 「大倭50年のはじめにあたり私の言っておきたいこと(続)」
 『平成6年1月23日 月次祭(お法話)』の後半部分(より)

令和6年6月16日

今回は、それらの軌跡をたどるかのような文化行事。集合場所の清水五条駅に集ったのは、かなり濃い面々で、青山法義・元子夫妻をはじめとして、中村千久佐さん、中島充世さん、さらに21年前の文化行事で明治天皇陵などを一緒にした三宅淳之さんが奥様・博子さんと長男・惇君を連れて来られていて、とつともうれしく思った。世話人の林修三さんと私を含めて、合計9名で、真夏日の蒸し暑い中、六道の辻へ。上方落語『幽霊館』をネタに大笑いし、小野篁さんゆかりのお寺へ。篁さんは、井戸から冥界への行き来をし、閻魔大王のお手伝いをしていたとか……。
 多国籍な外国人の垣塙で人が溢れかえる三年坂を登って、聖徳太子さんゆかりの法観寺へ。境内に少し入っただけなのに喧騒とは無縁で、一番奥の一角にある義仲さんの首塚では、林修三さんのお給仕で、みんなでごあいさつ。八坂塔の影で、緑の中を吹き抜ける爽やかな風で涼んだひとときは格別なものだった。
 その後、清水寺へ。誰も見向きもしない田村堂で、坂上田村麻呂さんに、ごあいさつ。清水の舞台からは、美しい緑の木々の間に、阿弖流為さん



▲六道珍皇寺 (青山法義さん撮影)



▲阿弖流為、母禮の碑。清水の舞台より下方の碑を撮る。(藤本宏秋さん撮影)

と母禮さんの石碑を見つけることが出来た。その石碑まで行くと、建てられたのが1994年とあって、大倭50年の節目の年と重なってうれしく思った。
 昼食後、解散かと思いきや、何故か耳塚へ行く流れに……。大倭会文化行事ではよくある事で、オプシオンにこそ、その神髓が現れることがある。耳塚には、韓国から来られたグループがおられた。その横を通過し、正面で耳塚に向かってごあいさつしていると、ガイドさんが日本語で「なにを、されていたのですか?」と話しかけてこられた。「これまでいろんなことがあったと思いますが、仲良くしましょうとごあいさつしていましたが」と応えると、「そうですね。ともに、なかよくしましょう」と握手を求めてこられて、集合写真を撮ることとなった。なんだか文化行事にふさわしい締めくくりだった。
 今度も頭幽不二を感じる大人の遠足となりました。ありがとうございます。

じんずうりきによせ
「神通力如是」の真意をさぐる

第三十一回

大倭教の源流にさかのぼって

今回も倭姫と奇稲田姫が登場し、饒速日命から

始まる皇統の流れを祝福してから、今こそ真の正

法妙法が立つ時であると語ります。中将姫も妙法

について語ります。この妙法について法主が語ら

れた記録があるので、それも再掲します。

また、今回の「附言」の中で、当時存命だった

成川栄三郎、矢追政一、成川貞、矢追久子の各氏

が登場しますが、その方々のガラス乾板の写真が

発見されたので、矢追妙月さん、成川富美子さん

の姿とともに紹介させていただきます。

原文

(昭和16年11月25日の続き)

全日、午後九時半。

倭姫、挨拶、御神楽。

「大海原ノ雲ワケ出デテ大空ニ光ヲ四方ニ耀キテ、八絃一宇ハ安ラケク治マル御代コソメデタケレ。」

其ノ光、我が日本ノ皇孫ノ御恵フカキ大稜威、一億民ニアマネク照シ、幾千歳ノ後マデモ、君ノヨハヒヲ民奉リ祝ヒ奉ルコソメデタケレ。題目。

之レ天津皇祖ノ御歌。

君ガ代ハ千代ニハ千代ニ二世世栄エ、大

内山ノ松ノ緑ノ色マシテ、竹ノ園生ノ賑ハヒハ、代代永久ニ千代ヤ重ヌラム」

「吾ハ大倭鷄杜ニ坐ス奇稲田姫。

皆者、ヨク聞ケヨ、今真ノ正法妙法立

ツ時ゾ、天ノ沼ヲ起ス時デアルゾヨ。

真ノ妙法題目唱ヘ悪魔退散コノ闇押開キ

テ、諸天善神八百萬神等ガ皆皆奉リ歡喜

シテ南無妙法蓮華經御聲ソロエテ唱ヘラ

レル安ラケク平ラケク治メル御代ト為シ

玉ヘ。此レ我が日本ノ皇孫ノ御心安ゼサ

セ奉ル道ナリ。各方此ノ事ヲ胸ニ體シ、

暇アル時ハ真ノ題目妙法唱ヘラレヨ。吾

レモ共ニ唱ヘム。吾レ妙法ト俱ニ世ニ出

ム」

附言、座にありし者、朝電話にて呼びし成川栄三郎、矢追政一、成川貞、矢追久子、日聖、輪孺香、夜の御神拝の前に日聖、靈感、神通力、霊覚、に就て

説けり、之の事説誤りあるや否に就て奇稲田姫命に伺ふに、「ワレモ聞ケリ。寸分ノ誤リナシ。日聖ノ前身ハ日蓮ナリ。真ノ妙法立テル大使命、末法ノ真ノ題目、世ノ人々ニ説カレヨ」と宣はる。

「ワラハハ中将姫。

父上ヨウコソ馳セ参ラレタ。真ノ正法

妙法エトクセラレシカ。父上、今日君ヲ

呼び参ラセシハ吾ガ疑ヲ解ク為、真ノ道、

吾ガ役目父上ニハオ分リニナリマシタ

カ。

今ノ母上ハワラハノ為ニ一心ヲ捧ゲ参

ラセ盡シ下サレシ恩、姫心ヨリ喜ビ奉ル。

何卒コノ上ハ父上幾久シクトモ白髪ノ後

マデ御中睦マシク過サセ玉ヘ。家ニ歸リ

ナバ妹一度此處ヘオコセラレテ下サレ。

吾ヨリ真ノ正法妙法ヲ教ヘ申サム」

註釈文

①矢追政一

法主父(隆藏)の弟。矢追久子の夫。

法主の叔父にあたり、武芸の道に長じていた人のものであった。法主によると、次のような逸話があるという。

「久子(妻)、面白いもの見せたらか」と言つて、部屋天井から細長い一枚の紙を垂らして、真剣で素早く何枚かに切り落としたり、「ほん(法主のこと)見ときや」と言つて、火鉢で使う備長炭を手の掌に持って片方の手の火管でポンポンと割つて見せてくれたそうである。またある時は鎖鎌(鎌に長い鎖を付け、その端に分

銅をつけた武器)の使い方を教えてもらった。この武器は鎖の部分を回転させる(振り回す)のだが、上から落ちてくる砂が下に落ちないくらいスピードで回すのだと教えてもらったそうである。

この政一叔父は源義仲の転生であったとのことである。(杉本)

②矢追久子

政一の妻。法主の叔母にあたる。私が大倭に入門した頃は双葉館の一室で元気に暮らしておられた。

久子さんは木曾義仲と異称される源義仲の従者・妾、巴御前の転生であったとのこと。この御前は「平家物語」諸伝本に、容貌すぐれた一騎当千の大將として描かれた。(山川出版社『日本史人物辞典』による)

この叔母さんが帰幽された時の事。

鈴月かあさんが死装束を用意されたのですが、久子叔母さんは女性の中でも小柄なほうでした。女性の和服は腰ひもで丈を調節するのですが、故人の腰ひもの調整がやりにくかったので、足先を巻き込んで長さの調整を省いて埋葬したところ、後日その様子を知らなかったはずの生母(法主母・日妙)さんのところに現れてきた霊界人の久子さんが「足元がもつれて歩きにくい」と言われたそうです。

この時の鈴月かあさんの気持を想像してみてください。この事があってからは、紫陽花邑の邑人で亡くなられた人の装束は本人が生きておられた時と同じようにして霊界に送るようにしています。(杉本)

③前身

この世に生まれる前の身。(大修館書店『新漢語林』による)

現代語訳

同日 午後9時半

倭姫、挨拶、御神楽。

倭姫「大海原の上にかかった雲を分け出て大空に光は一面に輝いて、全世界が安寧に治まる時代こそめでたいことです。その光である私たち日本の歴代天皇の恵み深き偉大なるご威光が一億の民をあますことなく照らし、幾千年の後までも天皇のご寿命を民が皆そろってお祝い申し上げますことこそめでたいことです。題目。

これは奇稲田姫の御歌です。

『天皇の時代は幾千年も代々に栄え、皇居の松の緑の色は濃くなり竹林の色が映える大倭鷄杜のにぎわいは代々永久に何千年も続いていきます』奇稲田姫「私は大倭鷄杜に鎮まります奇稲田姫です。皆の者よく聞きなさい。今は真の正法妙法が立つ時です。天の沼矛を起こす時なのです。真の妙法である御題目を唱え、悪魔を退散させ、この闇を押し開いて、諸天善神の数多くの高級霊人等の誰も彼もこそぞって歓喜し、南無妙法蓮華経を声をそろえて唱えられるような安穩で平和に治めることのできる時代となるようにしてください。それが私共日本の歴代天皇の御心を安らいでいただく道なのです。皆々さんこの事をしっかりと胸に刻んで、暇がある時には真の題目妙法を唱えなさい。私も共に唱えましょう。私は妙法と共に世に出ます」

(附言)この夜列席していたのは、朝に電話で呼んだ成川栄三郎、矢追政一、成川貞、矢追久子、日聖、輪孺香。

夜の御神拝の前に日聖が靈感、神通力、霊覚に

ついて話をした。この事について話に誤りがあったかどうかを奇稲田姫にお伺いしたところ「私も(日聖の話を)聞いていましたが、少しの誤りもありません。日聖の前の世の身は日蓮です。真の妙法を立てる大使命である末法の世の真の題目を世の中の人々に説きなさい」とおっしゃいました。

中将姫「私は中将姫です。お父様よく駆け付けてくださいました。真の正法、妙法を理解し納得されましたか。お父様今日あなたをお呼びしたのは、私への疑いを解くためです。真の道、私の役目をお父様はおわかりいただけましたか。

現在のお母様が私のためにその御心を(私に)捧げくださり尽くしていただいた恩を私は心より喜んでおります。何とぞこの上はお父様(お母様と)いつまでも共に白髪となられた後までも仲むつまじくお過ごしください。家に帰られたならば、一度妹をここへ来させてください。私より真の正法妙法を教えます」

参考「真の妙法とは」

『神通力如是』には「真の妙法」という言葉が何度も出てきます。

ここに「南無妙法蓮華経」についての質問に答えて法主自らが妙法についての説明をされている一文があります(『とおやまと』令和3年10月号)。皆様の理解の一助として再録しておきます。

《法華経と神ながらの道》

【質問…死んだ人の供養に朝晩、南無妙法蓮華経を唱えてあげています。私の自己満足なんです】
妙法というのは、仏教で言う宇宙の法則と云うことですね。釈迦如来は、甚深微妙の法と云う言

葉で表しておられます。口でも説けない、文字でも表せない、妙法と言うしかない不可思議な法則が宇宙に流れていると、経典に書いてある。法華経の中にもあります。仏のように悟った人間になつて初めて分かると言うんですね。

日本的に説明したら大倭の場合は神ながらの道なんです。陽性(ター)と陰性(カー)の二つの気によって一切の物が構成されている、ということは霊界から教えてもらいました。

この妙法の下に、蓮華という言葉が付いてますわね。それは妙法という宇宙の理法を、ひとつの形で表わしているんです。蓮というのは花が咲いた時に萼の真ん中に実が付いているでしょ。花が開けば中に実がついておると、これは結果同時という因縁因果の理法を表しているんです。

法華経というのは日蓮上人によって始められたものではないんです。中国から伝わって聖徳太子も法華経を講義されてるし、聖武天皇は全国に国分寺・国分尼寺を作つて法華経を誦誦させたり、伝教太子(最澄)も法華経の教えを広められました。

それはね、法華経の内容が日本人の古来から持つておつた神ながらの道と相一致する面が多かつた。それで仏教というものが日本に広まったんです。全然、相いれないものだったらめつたに広まりませんよ。

日本の神道というものは、全て形で教えてきたんです。そこへ仏教が哲学的に知識でもつて説明したから、日本人の心に沁み込んでいった。それが今、仏教だ神道だと二つのようになつてきてますが。

そういう法華経ですが、南無妙法蓮華経でなければいけないんだというような、色の染まったお題目だったらいけませんよ。》

今回の「附言」と写真について

本号の「附言」に記されている方々の写真を、法主が残されていたガラス乾板から選んで、読者の皆さんに見ていただきます。

古いガラス乾板の写真ですから、長期保存後の劣化により、今どきの写真のようにはいきませんがお許しください。(杉本)

附言にある各人の紹介として、過去の『神通力如是』の註釈文中で説明した時の掲載回と註釈番号を記しておきます。

輪儒香(妙月)・法主妻 第一回・註釈⑧

成川栄三郎 第十一回・註釈① (『おおやまと』令和元年5月号)

成川 貞 第十一回・註釈② (同・令和3年1月号)

矢追 政一 第三十一回・註釈①(同・今月号)

矢追 久子 第三十一回・註釈②(同・今月号)

成川富美子 第十九回・原文および附言 (同・令和4年5月号)



あじさい日誌

6月9日 午後2時から大倭神宮殿において、大倭会主催の祓会が開かれました。

夕方6時ごろから交流の家で北海道から来邑された守谷明宏さん(本紙の編集協力者)を囲んで本紙編集部員や邑人など9人とともに夕食会を開きました。(左囲み記事に詳細)

6月15日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

6月23日 午後2時から大倭大本宮の月次祭が行われました。

この日は昭和45年6月23日の法話をお聞きました。

6月24日 午後5時から本紙の編集会議が教務本庁で開かれました。

7月5日 午後5時から本紙の

編集会議が教務本庁で開かれました。

7月6日 午後2時から大倭神宮の月次祭が行われました。

6時半から大倭会館で邑倭の会が開かれました。

7月2日 午後2時より中堅職員研修会が法人会議室にてリモート方式で行われました。会場参加の職員は真剣に研修を受けていました。

(菅原園)

6月24日 朝から観光バスに乗り神戸どうぶつ王国の日帰り旅行に行きました。昼食はお弁当をおいしそうに食べ、お土産選びも楽しみました。動物見学やボードショーなども満喫しました。

7月7日 七夕で、昼食にそうめん、午後からおやつとしてゼ

リーが出ました。短冊や飾りなどを眺めたり、お話をしたり皆で楽しく過ごしました。(須加宮寮)

6月18日 日帰り旅行で琵琶湖博物館・明太パークびわ湖に行きました。バスの中では外出先にちなんだクイズに答えたり、皆で久しぶりの外出行事を楽しみました。

7月2日 七夕が近付き、短冊に願い事を書いたり、飾りを作つて笹に付けたりしました。短冊には、「幸せでいられますように」「健康でいられますように」など、さまざまな願い事が書かれていました。(長曾根寮)

6月10・16・19日(特養) 玄関前で紫陽花見学を行いました。三毛猫が散歩しているときがあり、皆で笑みを浮かべて見てい

守谷明宏さんを囲んで

6月9日の日曜日に『おおやまと』編集部員でもある守谷明宏さん(写真右)がはるばる北海道から相方さんとの旅行がてら大倭に立ち寄ってくれ、夜に交流の家で編集部一同と有志の皆さんが参加して夕食会が開かれました。

料理は大掃除の時にいつもお願いしているお弁当屋さんに頼み、和気あいあいとおしゃべりしたり、守谷さんの北海道の話などを聞きながらのひとときでした。そして編集の仕事が続けていただくことも改めてお願いしました。相変わらずダンディな守谷さんは交流の家で一泊され、翌日は相方さんの待つ大阪に移動されました。北海道に帰られてからのLINEによると「前回行ったのが2019年6月8日で、ちょうど5年前でした。初めて行ったのが1987年なので37年になります。(中略)大倭は私にとっては、とても居心地のよいところです。長い間何回も行っているということは、何かの縁があるのしょう」とのこと。

そしてこの日は奇しくも岸野デスクの月命日でした。始めに皆で手を合わせました。(中村)



大倭会秋の文化行事 定員につき募集終了のお知らせ

例年にはないことなのですが、本年の秋の文化行事はすでに定員となってしまいました。(中型バスの定員が27名のため)毎年定員を満すのに苦労していましたが、なぜ本年にかぎり早期の希望者が多かったのかは不明です。

ただ参加を希望されていた皆様には本当に申し訳ありません。次回からは、より考慮の上で日程の発表等を行いますので、ご了承のほどお願い致します。(係)

表紙写真によせて

井手泉さんがお元気だったころ、彼の自然観察のお供で奈良県吉野の原生林にしばしば通っていました。井手さんは自然の生き物や風景に感動すると、しばらくその美しさを味わった後、カメラを取り出して夢中でシャッターを切っていた姿を思い出します。対象はヘビやカエルや昆虫であったり、木やコケであったり、場合によっては空

の雲であったりときまざままですが、その集中力には驚かされました。この時は蜘蛛の巣の繊細な模様に見とれて撮影されていました。「自然の姿の中にカミを感じるので」とよく言われていました。(岸田)

あんない

*大倭会主催会

8月4日(日) 大倭大本宮境内の清掃神事として午前9時より。なお大倭墓地清掃を午前8時から行います。

*月次祭(大倭神宮)

8月6日(火) 午後2時より大倭神宮にて。

*大倭教立教開宣祭

8月15日(木) 午後2時より大倭神宮にて。

*東光大祭及び祖霊祭

8月18日(日) 午前11時30分から東方の碑、正午から拝殿にて。(6月号参照)

*月次祭(大倭大本宮)

8月23日(金) 午後2時より大倭大本宮拝殿にて。